

◆久松久子 選 ～思ひ出の一句～

夕暮れの筑波<sup>けむ</sup> 烟 らす霜くすべ

この句は、令和二年長塚節文学賞俳句部門で入選した作品である。「霜くすべ」という季語の俳句はほとんど詠まれることがなく、珍しいので採っていただいたのだらう。

「霜くすべ」とは、晩春に霜が降りて新芽が傷むのを防ぐために、籾殻などを焚きくすべて霜害から農作物を守るものである。この光景は、子どもの頃から見知っている故郷の景だが、それが「霜くすべ」という季語になっているのを知ったのは、なんと句作三十六年目のことである。この季語を私が詠まずしてなんとしようと思い、二年前に応募したものである。

私は昭和八年、長塚節と同郷の茨城県の生まれで、生家は呉服屋だった。店では数人の従業員を雇っていたが、ある晩、配達から戻った店員が、店先に自転車を倒したまま転がるように玄関を入るなり、「人魂に追われた」と真っ青な顔で戦慄していた。他の店員達は「そんなはずないだらう」と笑っていたが、当時まだ小さかった私は、あの時の店員の顔も、自分も追いかけるかもしれないと怖かったことも、はっきりと覚えている。

また、ある日、二階の窓から筑波山を見ていると、麓に小さな焰が二つ三つぼうと点っているのを発見した。「あれなあに」と、当時私の面倒を見てくれたお手伝いのおつやさんに尋ねると、「ああ、あれはね、狐の嫁入りの提灯の火よ」と教えてくれた。

そして、姉が出た憧れの女学院に入学し、高校時代の仲良し三人と下宿生活となる。学校では東京弁ができない田舎者三人は「おとなしいわね」などと言われていたが、下宿に帰るや否や地元のペヨペヨ言葉で姦しい。ストレス解消と相成りぬ。

家が恋しくなると、土曜日には上野駅で父の好きな雷おこしを買い、一駅ごとに近づく景に胸を躍らせる。常総線に乗り換える頃はずつぷりと日も暮れ、

延々と続く桑畑には、点々と灯る炎の幻想的な景。その頃は、さすがにもう狐の嫁入りとは思わなかったが、不思議な思いで眺めていた。

霜くすべは、大切な桑の木を寒さから守る先人達の知恵であり、それは風物詩となり脈々と続いている。それが、季語になっていることを歳時記に見つけた時は、なんとも言えない懐かしさと感動でいっぱいになった。

昔見た故郷の幻想的な焔は、火の霊でも狐の提灯でもなかった。子どもの頃からの謎はすっかり解明されたが、今でもその風景は、可愛がってくれたおつやさんの顔と重なりながら懐かしく思い出されるのである。

### 春征くや故郷の山河見渡して

昔は「勉強しなさい」なんて云われたことがなかったから、さっさと宿題だけ済ませ、友達を誘っては川に遊びに行った。鬼怒川は急に深くなる所があり危険なのだが、注意もされずのんきな親達だった。子ども乍らに浅い所を探りながら向う岸まで渡ったものだ。そんなある日、いつものように鬼怒川べりで友達と遊んでいると、土手に腰をおろしてじっと筑波山を見ている青年がいた。その青年に「あんた達、仲がいいね。なんて名前？」と聞かれた。私は「この人、タマちゃん」。たまちゃんは「この人、チャコちゃん」と指差し合った。青年はそれを聞いて「あんたら猫か」と笑った。そして、「自分は近いうちに出征するんだ。だから子どもの頃に遊んだ故郷を見に来たんだ」と言った。それに対して何と返したかは覚えていないが、その時の青年の寂しそうな顔は今でも忘れられない。

やがて戦争も終わり、復員者、引揚者が帰ってきた。あの時の青年は復員出来ていたのだろうか、それとも戦死してしまったのだろうか、と今でもふと思い出すのである。

### 筍を抱へ突撃三勇士

昭和三十一年、大阪で仕事をしていた夫と結婚し、京橋を皮切りに豊中の団地から天王山の麓、水の美味しい島本町に移った。島本町は、日本一の筍の産地である長岡京のお隣で、筍山迄は子ども達とハイキングによく出掛けた。そ

の時、筈掘りを見せてもらい、信じられない位太く長い筈を抱えさせてもらった。その時、小学校の教科書に爆弾を抱えた三人の兵士の絵が二頁に亘って載っていたのを思い出した。子どもの頃、戦死は称えられ、学校の授業では美化された戦時下の話を聞かされた。今更ながら、若い人達を沢山死なせた戦争が悔やまれる。

今は戦時中ではないが、若い人が減り老人が多い。年金は減るばかりで、私も老人の一人として申し訳ない気がする。また、ロシアがウクライナを攻撃している昨今、人の国まで盗らなくていいじゃないかと胸が痛い。戦争とは大きな盗賊だと思う。